

## 〈学内共同研究報告〉

# 「バーチャルユニバーシティにおける キャンパスライフの現状と創造」

## — 2019年度東京通信大学共同研究費助成課題報告書 —

小田 弘美・榎本 則幸・川嶋 啓右・今橋 みづほ・藤田 則貴・森 佳奈枝

### Abstract

This is a quick report of our collaborative research project on the online campus life at virtual universities, supported by the 2019 collaborative research funding from Tokyo Online University (TOU). The goal of the research project was first to understand the current status of the online campus at TOU, then to present a proposal for online communicative tools, interfaces and platforms to improve the online campus life at TOU for students and faculty. We conducted a questionnaire and interview survey, and data analyses of the intra-SNS service at TOU. The results indicate that students are feeling strong solitude and anxiety, and looking for community and connections with other students. However, at the same time, they are reluctant to join the intra-SNS service because of a phenomenon we decided to call a “negative chains” problem. Thus, they are in the clutch of a dilemma between two opposing emotions. Based on our research results, we are making a few proposals for improving the interface of the TOU campus homepage and new mechanisms for online campus communication. We believe our research results would benefit other online-only universities.

**Key Words:** Online Campus Life, Virtual University, Online Community

### 1. 序

東京通信大学のようにオンラインのみで授業を行う大学では、何らかのコミュニケーションツールがなければオンライン上のキャンパスは存在し得ない。また、情報通信技術を最大限利用したシステムを活用しているのにも関わらず、そこで学ぶ学生たちは孤独である。友人がおらず孤独に勉強するという環境が学業に悪い影響を及ぼすと言う事は多くの遠隔教育についての文献でも言及されていることであるが(Croft ほか, 2010)、想像に難くない。

東京通信大学においても、学生生活を感じられないとの学生からの強い要望に応え、2018年7月に学内 SNS を開始した。ところがその利用はあまり広がらなかった。後に見る様にそもそも在校生の 2/5 程度の学生しかアカウントを持っておらず、日々の投稿も新入生が入って来ても増加が見られないという状態である。

これまでの遠隔教育におけるテクノロジーの研究でも指摘されていることであるが、問題はただツールを提供すれば解決すると言う単純なものではないのである。この問題の困

難さは、10年ほど前に、仮想空間の中にキャンパスを作り、学生はアバターとしてそこで授業を受け、学生生活を送ると言う米国初の企てに日本の名だたる大学も名乗りをあげたが、米国でも日本でも現在ではほとんど聞かれることがなくなった、と言う一例を考えてみれば明瞭であろう。実は、SNSを始め、MOOCsと呼ばれるオンラインで無料の大規模な無料のコースを提案する、といった試みの多くも同様に初期の期待を実現できていない状態である(Parr, 2013)。

このようなことから、この問題はテクノロジーだけの問題ではないということが容易に推察される。そこで、我々は技術だけではなく、人間的視点、すなわち、孤独、不安といった心理的、社会的側面の問題を理解することから始めることとした。この視点から、現状をまず良く理解し、そこから、学生や教職員をオンラインで結ぶことがなぜ難しいのかという基本的な問題についての調査とデータ分析を行い、その結果に基づいて、快適なオンラインキャンパスの実現のための提言をまとめることを目的とする。

我々の当初の研究計画は以下の様なものであった。

1. オンラインキャンパスについてのアンケート調査
2. インタビュー調査
3. 学内 SNS である Yammer のデータの分析
4. 内外の大学における試みの調査

残念ながら4については、コロナウィルスの蔓延によって海外への渡航が制限される様になり、予定していた視察は行えなくなってしまったので、文献調査や経営的視点からの考察などを加えることとした。

以下、いくつかの部分に分けて研究結果の報告を行う。

- アンケート調査結果の報告 (榎本、川嶋)
- インタビュー調査結果の報告 (今橋、藤田)
- Yammer データ分析結果 (小田)
- 東京通信大学のオンラインキャンパス活性化への提言 (森、小田)
- 経営的視点から見たバーチャルユニバーシティ (川嶋)

基本的な文献調査の結果は既に昨年度の本学研究紀要にて報告した(小田ほか, 2020a)。また、アンケートやインタビュー調査の結果の一部は、いくつかの研究会や学会にて報告を行なっている(Oda ほか, 2020; 小田ほか, 2020b)。

## 2. オンラインキャンパスでのアンケートとインタビュー調査

### 2.1. 調査の目的と方法

SNS の普及は、2004 年 4 月に mixi がサービスを開始し、数年で数百万人が利用するサービスへと成長してから、日本でも SNS は急速に拡大を続けてきた。2008 年にマイクロブログの先駆けである Twitter が日本でのサービスを開始、同年には Facebook も日本でのサービスを開始した。近年、写真を中心とした SNS として人気がある Instagram は 2010 年に、東日本大震災をきっかけに開発された LINE は 2011 年に、それぞれサービスを開始した(青山ほか, 2018)。

このように SNS はわずかな間に広く人々に普及してきたことがわかる。複合的なプラットフォームである SNS は、人々のコミュニケーションや生活のありかたを変えてきており、人間関係の構築や維持においても無くてはならないツールであるとなっている。

しかし、SNS の利用実態については、市場調査はされているが体系的な検討はあまり行われていないのが実情である。(高谷, 2017)は、女子大学生を対象に、Twitter, Facebook, Instagram の利用実態を調査しているが、授業時のコメント、インタビューによって大まかな傾向を示すなど、探索的な検討にとどまっている。また、(青山ほか, 2018)は、Twitter 以外の SNS も含めた、大学生の利用実態についての体系的な調査を行っているが、現在の大学生は、SNS をどのように用いて、どのようなコミュニケーションをしているのかを具体的に明らかにするという調査である。

そこで、本調査では、TOU が導入した学内SNS(Yammer)以外のSNS も含めた、学生の利用実態と、学生が交流するための物理的なキャンパスを持たないTOUのようなバーチャルな大学において、学生は他の学生との交流をどの程度望んでいるのか、現在の自分の学習の状況の孤独感や不安感があるかなどについての調査を試みた。

本プロジェクトのこれまでの研究によって、今後解決して行かなくてはならない問題として以下のようなものが明らかとなってきた。

- ・ 学生間の相互のやりとりにふさわしいコミュニケーションツールはどのようなものか。この点については技術のサイクルのようなものが明らかとなったが、人を繋ぐ技術的視点だけでは解決の糸口は見えてこない。
- ・ 学習やオンラインキャンパスへの参加者の持つ不安や孤立感というものが、遠距離学習の満足度に大きな影響を持ち、その低減が課題となる。
- ・ 多くの研究が既になされているが、対面とオンラインの対話の本質的な差の問題が課題として残る。これは教育の場面に関わらず、より大きなコミュニケーションの本質に関わる問題に繋がるものである。

(小田ほか, 2020a)

このような要素を考慮した上で有機的人間関係を支えるやりとりの仕組み、形態を考える必要がある。

これらの問題を解決するために、東京通信大学のようなオンラインで授業を行うバーチャルユニバーシティにおける望ましいキャンパスライフとはどのようなものかを調査し、

より学生に満足感を与える「キャンパスライフ」の形態を探ることが目的である。

学内の SNS として公開されている Yammer のやり取りの分析に加え、キャンパスライフのあり方や希望についてのアンケート調査、インタビュー調査による聞き取りを通して、研究に参加する情報マネジメント学部、人間福祉学部の教員のそれぞれの専門的視点からオンラインキャンパスの現状や問題点を明らかにすることにより、オンラインキャンパスの相応しい形態、交流のためのツールやプラットフォームについての提言をまとめることを目的としている。

## 2.2. 研究の方法・内容

学内 SNS のデータの分析、アンケート調査、インタビュー調査、これまでのオンライン/バーチャルキャンパスの試みの調査等を通して、特に東京通信大学の環境における現状の理解と解決への手がかりを以下の方法を用いて明らかにする。

### 方法

- 1 データ分析
- 2 アンケート調査
- 3 インタビュー調査

### アンケート内容

1. あなたの性別は
2. あなたの年代は
3. あなたの学年は
4. 全員の人にお聞きします。本学においてオンラインで学ぶ際に孤独感を感じることは、どの程度ありますか
5. 全員の人にお聞きします。本学においてオンラインで学ぶ際に、どのよ  
うな時に孤独感を感じますか
6. 全員の人にお聞きします。本学においてオンラインで学ぶにあたって、  
どのようなことが不安に感じますか
7. SNS（ソーシャルネットワークサービス）は利用していますか
8. どのようなサービスを利用していますか
9. 本学内の SNS である Yammer は知っていますか
10. いつ Yammer を知りましたか。
11. どこで Yammer を知りましたか
12. Yammer に参加した理由はなんですか（複数回答可）
13. Yammer に参加した理由はなんですか（複数回答可）
14. Yammer の利用頻度はどのくらいですか
15. 登録しているグループ数はどのくらいですか



Figure 1: アンケート画面

16. Yammer を利用してみたの感想（複数回答可）

17 「2-8」で良い感想（満足・まあまあ満足）を回答した理由は何ですか

（自由記述）

18. 今後も Yammer を利用したいですか

19. 「2-10」の（ぜひ利用したい、必要があれば利用したい）の理由についてお聞かせください

（自由記述）

20. 「2-10」の（できるだけ利用したくない、利用したくない）の理由についてお聞かせください

（自由記述）

21. 「2-4」で Yammer に参加していないと答えた人にお聞きします。なぜ Yammer に参加（利用）していないのですか

22. アンケートの項目についてさらに詳しくお聞きするため、インタビューを実施したいと思いますが、インタビュー調査に協力していただけますか。

※インタビュー調査の内容は、このアンケート内容に準拠したものです。

※インタビューは、対面もしくは Skype で行います

23. インタビュー調査にご協力いただける人は、連絡を取ることのできるメールアドレスを教えてください

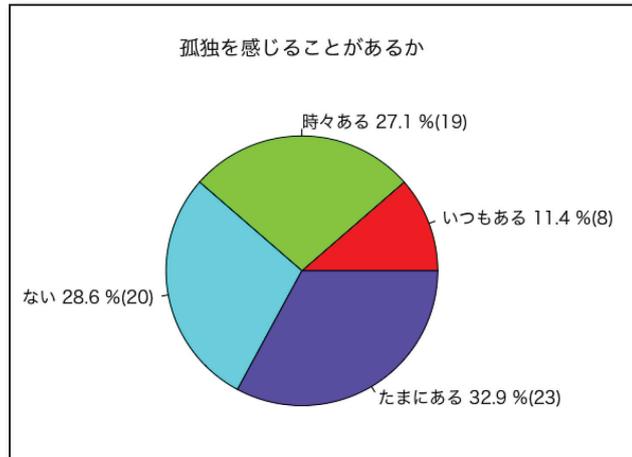


Figure 2: 「孤独を感じることもあるか」

## 2.3 調査結果と分析

東京通信大学の全学生を対象として、オンラインでのキャンパスライフに関する無記名アンケートを実施したところ、70名から有効な回答を得ることができた。

アンケートからは多くの情報を得たが、ここでは主に「オンラインで学ぶ際の孤独感や不安について」と「学内 SNS を含めた SNS の利用状況」に関する回答についてまとめる。

その回答は以下の通りであった：

「オンラインで学ぶ際に孤独感を感じることはありませんか」との質問に対し、それに対して「いつもある」と答えた学生は 11.4% であった。また、「ときどきある」と答えた学生は 27.1%、「たまにある」が 32.9% であった。一方、「ない」と答えた学生は 28.6% であった

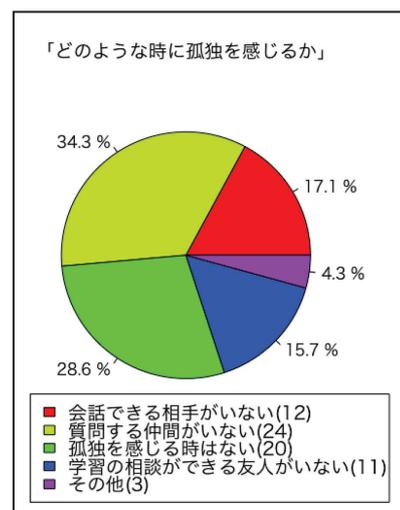


Figure 3: 「孤独を感じる時」

(Figure 2)。

そして、「オンラインで学ぶ際、どのような時に孤独感を感じますか。」との質問には、「学習の相談ができる友人がいない時に感じた」と答えた学生が 15.7%であった。また、「困ったときに質問する仲間がいないと感じた」と答えた学生が 34.3%、「会話できる相手がいない時に感じた」が 17.1%であった (Figure 3)。

また、「オンラインで学ぶにあたってどのようなことが不安に感じますか」の質問には、「情報の不足を感じた時」34.3%、「自分の解答がどう評価されているかわからない時」32.9%、「仲間や教員が見えないという不安を感じた時」12.9%、「直接触れ合う人間関係がないことへの不安を感じた時」10%であった (Figure 4)。

この結果から、キャンパスに相談やアドバイスをしてくれる友人がいないことは、不安と孤独の主な要因となることが分かる。またその他の自由記述からの回答では、「自分の学習進度についての不安感」や「教員に相談できない不自由さからの孤独感」などがあつた。

東京通信大学では学内 SNS を導入しているが、そのことを「知っている」と答えた学生は 75.7%であった。そして、それに「参加している」と答えた学生は 60.0%であった。しかし、参加者のうち 59.5%が学内 SNS 利用の感想として何らかの不満をの持っていた。また、利用頻度も月 3 日以下が大半であり (Figure 5)、学内 SNS に参加している全体的な割合が約 2/5 であることと合わせると、SNS の利用は盛んであるとは言い難い状況である。

アンケートの結果から、多くの学生が不安や孤独感を持っており、学生間の交流を求めているが、一方で、強い要望があつて始まった学内 SNS はそれほど使われていないということが明らかとなった。

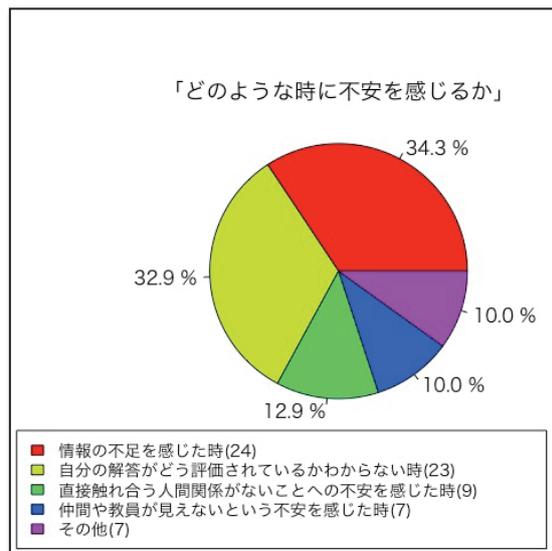


Figure 4: 「どのような時に不安を感じるか」

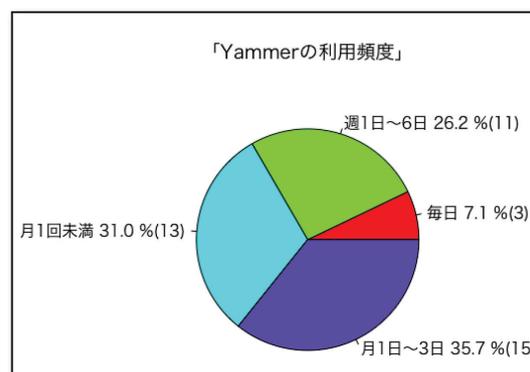


Figure 5: 「学内 SNS の利用頻度」

### 3. インタビュー調査の結果と KJ 法による分析結果

#### 3.1. インタビュー調査の概要

前述のように、本学学生がどのようなことに孤独感や不安を感じているのか、SNS・Yammer の利用状況などについてのアンケート調査を実施し、回答を得た。これらのアンケート調査の回答内容について、個別の状況を更に詳しく把握することと、孤独感や不安を軽減するための方策を探るために、アンケート調査の際に同意を得られた学生に対してイ

インタビュー調査を行った。インタビュー調査は、2019年10月から11月に実施したアンケート調査に回答した学生のうち、インタビュー調査を希望した学生12名（情報マネジメント学部9名【女性4名、男性5名】人間福祉学部3名【女性2名、男性1名】）に対して、Skype または本学新宿駅前キャンパス及び名古屋駅前キャンパスにおいて、対面にて実施した。

インタビューの対象となる学生に対して、同意書を作成し、同意を得ている。インタビュー内容については、個人情報特定される可能性のある情報に関しては、削除して分析結果をまとめた。

インタビュー調査は、半構造化面接を用いて、おおよそ40分を基本として実施した結果、1回あたり30分から1時間30分の時間を要して実施した。

### アンケート調査及びインタビュー調査の分析方法

今回のアンケート調査とインタビュー調査を分析する際には、KJ法(川喜田, 1967, 1970)を採用した。KJ法に従って学生から収集したアンケート調査とインタビュー調査のデータで印象に残ったものをカードに記入し、類似性のある項目を集めてグループ化し、各々カテゴリ化した。これらの分析結果の一部を以下に示す。

## 3.2 KJ法分析の結果

### 3.2.1 不安

- ひとりで学ぶことへの不安
- 学習環境を整えることへの不安（モチベーション、時間、場所）
- 人間関係を構築、維持できるか不安（他の学生の存在が把握しにくい、喜怒哀楽等の体験が少ない）
- 授業が一方通行的な形態のため不安
- 困った時の対応先がない→質問等が言い合える場が必要、共有できる場が欲しい

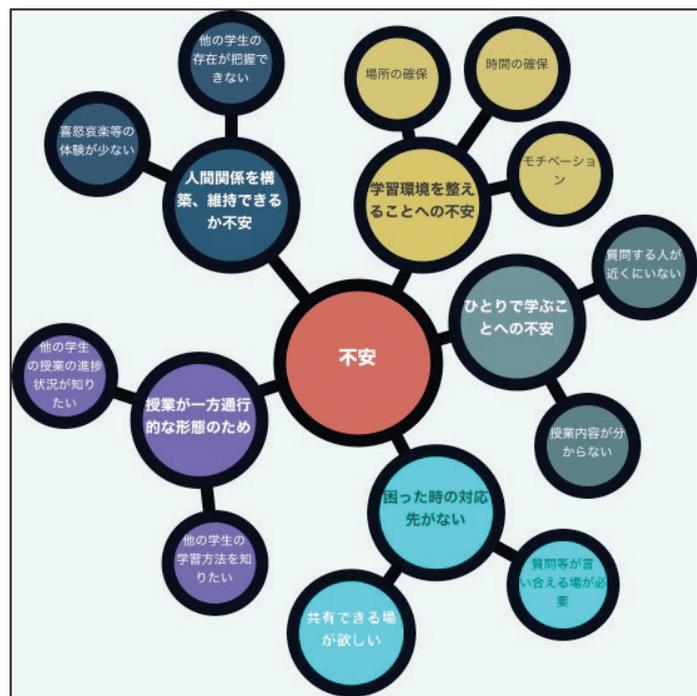


Figure 6: 「オンラインで学ぶ学生の不安」

### 3.2.2 孤独感

- 孤独を感じている

- 授業が一方的な形態である
- 授業で行き詰った時
- 質問する仲間がいない
- 孤独を解消する方法
  - 仲間同士で意見交換
  - 情報共有できる場が必要
  - 大学側から多くの情報を発信する

### 3.2.3 コミュニティの必要性

- 相談相手が欲しい
  - 一緒に学習する場が欲しい、学習相談ができる友人がほしい
- 異なった意見のやり取り
  - 他の学生の目に触れる場に投稿するようにしており、年代、立場が違う中での意見交換は有効である
- 仲間作りが必要
  - オンラインでの交流会に参加、大学主催のイベントに参加する
- 授業内容をさらに議論する場が欲しい
  - 分からなかった部分に意見が言える場、質問できるワークショップの開催
- 実際に顔を会わせる場が必要
  - オンラインだと素性が明らかにならないため、会う機会も必要、サロンが欲しい

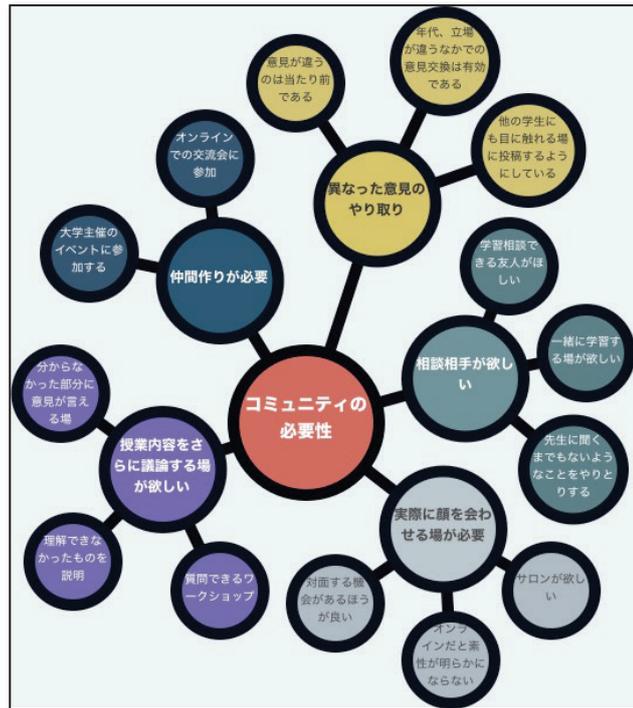


Figure 7: 仲間、コミュニティの必要性

### 3.2.4 SNS の評価

- SNS の利用には利点がある
- 情報を得るにはよいが発信はしない
- 学ぶモチベーションが維持できる
- SNS にはわずらわしいことがあるので使いにくい
  - 文字のみの表現に限界がある（文字起こしに時間がかかる、文字制限があり議論が深まらない）
  - SNS は不要な情報も入ってくる
  - SNS での問い合わせには時間がかかる
  - 自分の情報が公開されたり、どのように扱われているかみえないので不安である

### 3.2.5 Yammer は使いにくい

- ログインが面倒
- 面識のない人に自分の氏名や身分が分かってしまう
- 他の SNS より劣っている
- 役立つ情報が少ない（頭にくる、わからないなどはあるが...）
- 使っている人が少ないのでつながれないのであまり使っていない

### 3.2.6 本学が管理していない SNS の評価

- 使いやすい
- 本学学生とつながっている
- 否定的意見に表面的に賛成する傾向がある

### 3.2.7 負の連鎖

- 過激な発言が負の連鎖をつくる
  - ◆ 批判の応酬となる
- 否定的な意見が拡散して行く傾向がある
  - ◆ ネガティブな投稿に不快感
  - ◆ 肯定的意見に否定的意見が付き拡散される
  - ◆ 大学や授業への肯定的意見を出すと攻撃される
  - ◆ 安直な勉強の仕方を投稿する人がいる

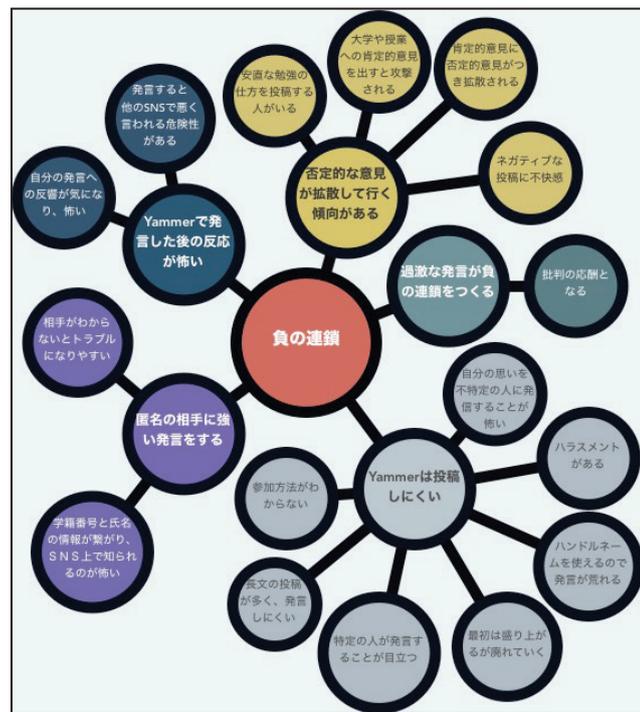


Figure 8: SNS における「負の連鎖」

- Yammer で発言した後の反応が怖い
  - ◆ 発言すると他の SNS で悪く言われる危険性がある
  - ◆ 自分の発言への反響が気になり、怖い
- 匿名の相手に強い発言をする
  - ◆ 相手がわからないとトラブルになりやすい
  - ◆ 学籍番号と氏名の情報が繋がり、SNS 上で知られるのが怖い
- Yammer は投稿しにくい
  - ◆ 参加方法がわからない
  - ◆ 長文の投稿が多く、発言しにくい
  - ◆ 特定の人が発言することが目立つ
  - ◆ 最初は盛り上がるが廃れていく

- ◆ ハンドルネームを使えるので発言が荒れる
- ◆ ハラスメントがある
- ◆ 自分の思いを不特定の人に発信することが怖い

### 3.3 まとめ

本研究チームで行ったインタビュー調査の分析結果から、「コミュニティの必要性」と「SNS利用への抵抗感」との関係には、「ジレンマ」があることが分かった。

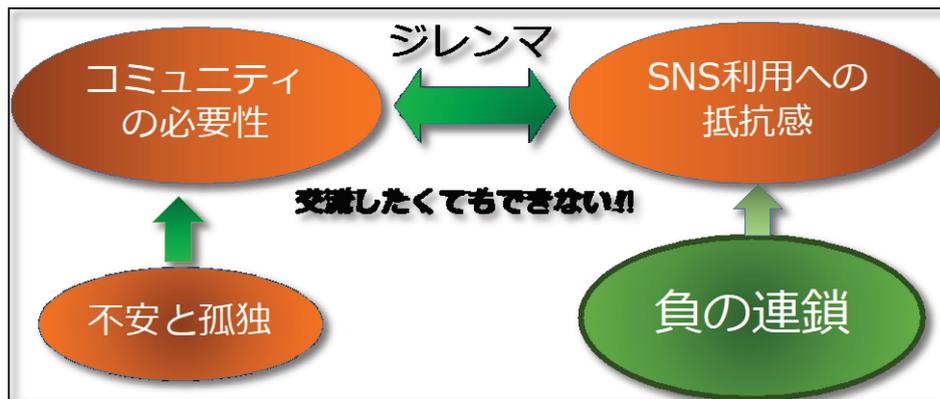


Figure 9 : 「学生の持つジレンマ」

具体的に見てみると学生は、「不安」と「孤独感」を抱え、「コミュニティの必要性」を強く感じている。そのため、SNS を利用したいと考えているが、そこには、今まで述べてきたように「負の連鎖」がある。そのため、学生は学生同士及び教員と交流したくても交流できないという状態にあり、「ジレンマ」を抱えている状態にあるといえる。

それでは、その「ジレンマ」を解決するためにはどのようにしたら良いかということについて、以下に2点ほど示す。

- ① 「負の連鎖」をどのようにして解いていくのか
- ② 学生のインタラクションを活発にするには、どのようにすればよいか

以上のことが検討課題となる。

## 4. Yammer データ分析

TOU の学内 SNS である Yammer は、2018 年 7 月に学内で公開されたが、今回その準備段階であった 2018 年 2 月から 2019 年 10 月末までのデータを匿名化処理を行った上で提供を受け、分析を行った。基本的な結果を概観しておくことにしたい。

約 15,000 件の投稿データがあったが、投稿者数としては 689 人であった。その中には 1 人で 500 件以上の大量の投稿をするような人々がいるが、それに続く人々は急速に投稿の数が減少する。突出している人々とその他の人々の間に大きな差があることがわかる。

Figure 10 には 50 件以上投稿をした 44 人の人のグラフが挙げてあるが、ここからその傾向は明らかであろう。個々のグループを見てもこの傾向は変わらない。

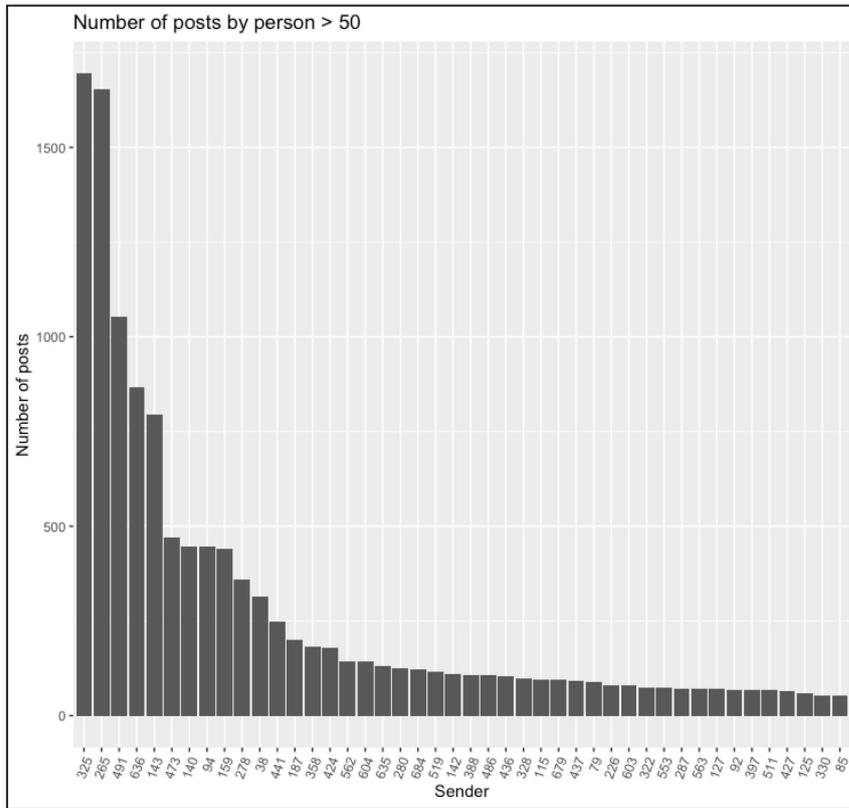


Figure 10 : 上位 44 人の参加者の投稿数

投稿に現れる投稿者間の関係をネットワークにして分析しても、中心的なメンバーが数人おり、その周りのメンバーが周囲から彼らを取り囲むというパターンが見られ、上のグラフに現れる傾向と合致したものとなっている。

特に興味深いのは、月毎に時系列に並べてみた結果である。2018年7月が学内公開された月であるが、この月には3,000件を超える書き込みがあったのであるが、その次の月には1,000件を割り込んでおり、それを下回る水準で推移するようになる。次に投稿が増えているのは、2019年4月であり、これは新入生が入ってきた月である。この月は1,600件ほどに増えているが、ここでも次の月には800件以下に下がっている。これは新入生が参加する以前の水準である (Figure 11)。

ここの結果から、Yammer 開設時にアクセスした多くの学生の期待があつという間に失望へと変わってしまったという様子が推察される。2年目の新入生の数字はさらに深刻であり、彼らの一体どれほどが Yammer を使い続けているのであろうか。

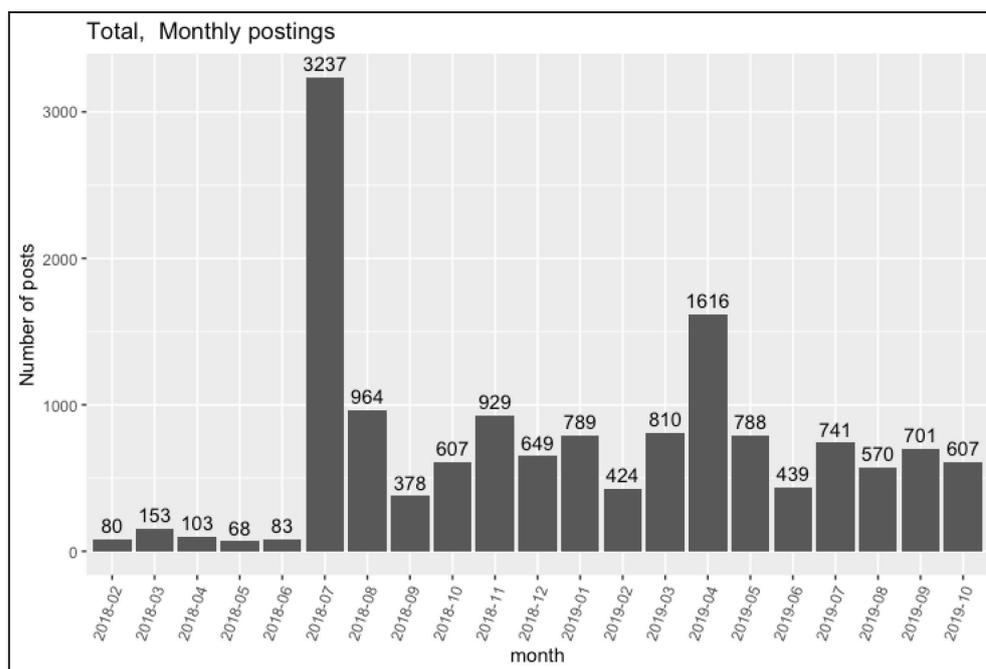


Figure 11 : 月毎の投稿数の推移

詳細は割愛するが、個々のグループの投稿を分析して、頻繁に用いられている感情を示す表現を抽出してグラフ化してみると、否定的な表現が多く用いられているグループが散見される。もちろん和気藹々とやっていることが伝わる表現が出ているグループもあるが、先に見た「負の連鎖」が起きている投稿のやり取りも実際に確認することができる。

## 5. オンラインキャンパス活性化のための提言

本プロジェクトの目標の一つは、調査結果に基づいて、学生同士が学習へのモチベーションを高め合い、大学への誇りを育ていけるようなオンラインキャンパスの実現に向けた提言を行うことであった。先述の研究結果から、我々はオンラインキャンパス活性化に対し下記の三点が必要であると考えている。

- 孤独、不安への対応 ——> 提案 1
- 仲間、コミュニティ ——> 提案 2
- 負の連鎖の克服 ——> 提案 3

本章では、上の3点それぞれに対応した3つの提案を行い、実装した際の想像図を用いながら説明をしていきたい。

### 5.1 キャンパスの賑わいを伝えるインターフェース（提案1）

第一に、孤独、不安への対応として、キャンパスの賑わいを伝えるインターフェースを提案する。Figure 12 の通り既存のバーチャルキャンパスシステムの右側にボタンを設置、縦長のパネルを表示させるようにし、バーチャルキャンパスで学生の賑わいが見えるようにする。



Figure 12 : キャンパスの賑わいを伝える（1）

パネルには、同時に学習している学生数やアクセスのある場所、学内 SNS から抽出した「今日の話題」の一部を表示できるようにする。これにより、他の学生の存在やともに学修しているという状況を感じることができる。



Figure 13 : キャンパスの賑わいを伝える（2）

また地域ごとの学生数の分布を色別に地図で示すことで、国内外のどの地域にどれくらいの学生がいるのか、自分の住んでいる地域はどうか等がわかるようにすることで、学校全体の学生の状況を把握できるようにすることもできる。

## 5.2 パーチャルサロン (提案2)

第二に、バーチャルサロンを提案する。Figure 14、15 に示す通りアバターや分身ロボットを通してコクーンタワー内外の人々を結び、物理的な距離というハードルを下げることで、より円滑なコミュニティの形成、コミュニケーションの実現を目指す。

なお、分身ロボットのカメラを通してみえる映像は Figure 16 のようになる。

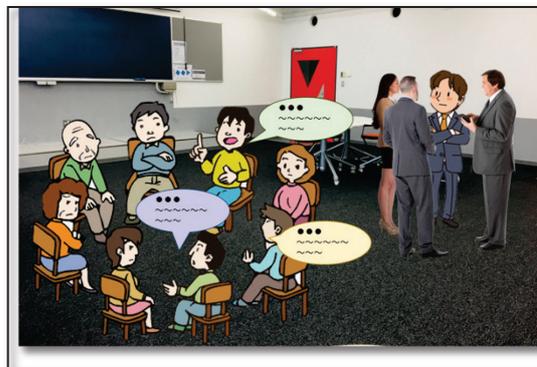


Figure 14 : アバターのいるバーチャルサロン

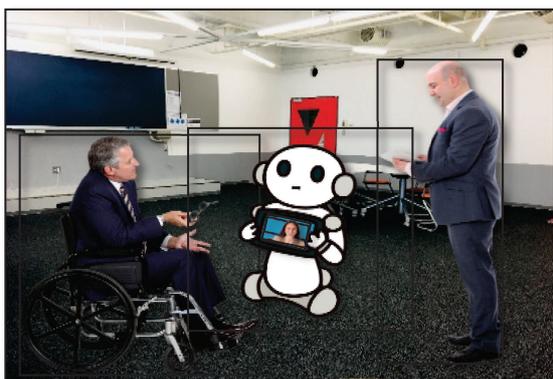


Figure 15 : 分身ロボットのいるバーチャルサロン



Figure 16 : 分身ロボットからのビュー

## 5.3 負の連鎖への対応 (提案3)

負の連鎖は、肯定的な投稿に対して、それを揶揄したり、否定するような投稿があり、それが拡散していくという厄介なものである。ここには、対策として2つの方向性が考えられる。

- A. まずその根元を断つために、スレッドの最初の投稿がなされる際に、自然言語処理技術を用いて、その投稿に否定的な方向性が見られることを警告して、再投稿を促したり、場合によってはブロックする。
- B. オンライン掲示板などには、モデレータを配置し、否定的傾向の投稿を抑制する。



Figure 17: 提案3A. の実施イメージ

A.の提案については、一部すでにそのような機能を備えたサービスもあるが、現在も活発に

研究が行われている分野であり、その実証の一例として考えることができる。また、B.については、そこに教員や学生ボランティアなどのモデレータ役の人がいることがある程度有効であることはすでに指摘されていることであり、十分想像できることである。これも検証してみる価値のある方策であろう。

## 6. 経営的視点から見たVUとオンラインキャンパス

大学とは学術の研究及び教育の最高機関であるのは誰も知るところであるが、同時に常に変化を求める組織でもある。この章では、オンラインキャンパスを持つVU（バーチャル・ユニバーシティ）の経営的視点に関する今後の課題（組織の変化）について述べたい。

### 6.1. アメリカの教育産業の問題から見るVUの経営的視点

アメリカでは1990年代から2000年代において、成長企業といわれる25社のうち5社が教育企業であった。教育産業が私たちの社会に存在しても特に違和感を覚えないが、「教育企業」という言葉には抵抗を感じる。大学「企業」が、教育をビジネス（学位商法）として企業利益を産んでいるということ自体がおかしな構図である。教育とは、教え育てるという意味合いであり、利益創出を意味していない。

#### ・オンライン大学（VU）に求められる教育と経営的視点

教育は、教え育てることである。また、大学は、知識、技能などの学習を促進する教育活動の場である。VUにもそれは同様で、経営的視点（教育的視点）からも以下の3点が求められる。

- 1) ディプロマ・ミル diploma mill（学位商法）をしないこと
- 2) 単なるオンライン教育をしないこと（大学教育の提供を行なうこと）
- 3) 営利大学 for Profit colleges にならないこと

大学としての本来のあるべき姿である、「大学教育」を学生に真摯に提供することが大学経営の基本である。その提供は、学生及び社会に認知され、結果として、自身の学生募集など大学経営にもプラス効果を発生させることになる。

### 6.2 VUの教育と経営的課題

テクノロジーが進化した現在、社会における高等教育の文化についてどうあるべきかという問題がある。それに対して、大学の制度を構成する3つの要素が概観<sup>ii</sup>されている。

- ・教授法と質の高い教材制作方法の発展
- ・オンライン教育の向上と教員の適切な処遇
- ・教育の発展向上のための他機関との連携促進

以上は、高等教育機関の教育形態における基本的な変革を意味している。それに加え、経営的課題として、大学の財務内容の充実が挙げられる。

遠隔教育を社会に知らしめたオンライン大学としての先駆者であるイギリスのオープン大学（Open University）は、通信教育というよりは「大学教育」を提供するというところに努力を払った。オープン大学は、通信制のオンライン大学であるが、広いキャンパスも持っている。そこでは大学での学習の雰囲気や醸成されるように、地方在住チューターのネットワーク、スクーリングといわれる一定期間のキャンパス学習プログラム、学生相互の支援グループを構築してきた。このような教育的な雰囲気を創り出すことがVUの最大の課題である。

そのオープン大学では、授業料や助成金以外の収入が全体の約9%、約50億円となっている。(The Open University Financial Statements for The Year Ended 31 July 2019より) 経営的視点を考慮するならば、安定性のある収入としての授業料及び助成金だけに限らず、それ以外の収入(学債、寄付金、大学グッズ販売等)の取り入れにも経営努力を払う必要がある。特に寄付金においては、わが国の寄付金総額は7409億円(日本ファンドレイジング協会寄付白書2015より)であるが、研究及び教育関係では8.5%しかない。寄付金は、文部科学省による寄付金控除対象では所得税の控除対象となる為、そのことをVUが社会に周知することにより教育(大学)への寄付金は更に伸張の余地があると思われる。

### 大学評価と財務

企業の格付けとは、社債(株式会社が発行する債券)等を発行する発行体の返済能力を評価し一定の記号で表示することである。信用度、安全度について、財務内容などから総合的に判断し記号(A, B等)で表示する。投資家にとっては、格付けが高いほど安全性が高いと判断できるが、発行側にとっては高い格付けは低利回りによる資金確保につながる。このことは、大学も同様である。つまり、財務において高い格付けを得れば、信用度及び安全度からの低金利による学債発行につながる。

なお、私立大学の経営は「自己資本経営」が基本といわれ、校舎建設や設備拡充などは自己資金の準備から担保し、借入金など外部資金に頼らない経営が原則である。その意味で、外部資金である学債は負債であり、その金利は大学の経営状況に関わることである。

### ハーバード大学の格付け評価

Harvard University Financial Overview 2019によると、ハーバード大学は2017年11月の格付けとして、S&P Global RatingsではAAA評価<sup>iii</sup>であった。また、同年12月のMoody's Investment ServiceではAaaの評価である。この評価は、ハーバード大学の財務諸表から判定されたもので、投資対象として安全性が高いということを意味するだけでなく、学生も安心して学習に専念ができるという環境を保持しているということでもある。そして、この高い格付け評価は、VUにもその要求がされて然るべきである。

これからの大学評価は、教育、研究の他に、「財務」という観点からも評価される必要があるのではないだろうか。VUの経営的(教育的)課題である。

## 6.3 VUの社会的評価向上と経営的視点

日本では、学歴と職務(仕事)の関係はあまり聞くことがないが、外国、特にアメリカ、カナダなどでは学歴と職務が一致する関係(学歴=職務)である。例えば、カナダの銀行だが、高卒の業務、短大卒の業務、大学卒の業務、そして大学院修了者の業務と、職務と学歴が歴然としている。もちろん、学歴と人間性は関係がまったく認められないが、その組織においては職務と学歴は差別ではなく区別がされている。

グローバル化の社会、この傾向は日本でも一部の外資系企業において踏襲されている。そのような状況を理解しているのか不明であるが、キャリアアップとしての大学教育を受ける社会人学生は最近、多くなっているのは事実である。今までの日本の文化では、教育は名声や信頼の証であったが、アメリカと同様、「教育は個人的な発展及び成功への投資」<sup>iv</sup>という文化に変化しているのかもしれない。

オンライン教育は、社会に役立つ教育システムであり、そしてVUはリカレント教育<sup>v</sup>という観点からも社会に役立つ大学である。VUで学習をする多くの社会人学生のなかには、大学卒業の資格を既に得ている学生もいる。彼ら彼女らは、働くことを前提とした学び直しである。一方、大学卒業資格を希望する学生、特に社会人学生にとっては基礎教育から飛躍した新たな学問への入り口である。そして、更に社会で活躍し続けるための手段であるかもしれない。

確かに、大学卒業資格(学士)を希望する社会人学生には、VUは就業の合間の貴重な休

み時間に学習ができる教育利便性の高い大学である。前述のように、社会人学生にとっては、教育は個人的な発展及び成功への投資であるが、VUでの学習はそれが実践できるキャリアアップの場でもある。

ここで問題がある。それは、VUにおいて学士資格の取得がキャリアアップにつながるのだろうか？という懸念である。オンライン大学を卒業し、大学卒業資格を得たとしても企業側がどの程度の評価を学生に与えるのだろうかということである。高等学校を卒業し、社会に出て就職、入社後に大学卒業資格である学位を得ても、その人の評価は変わらないことが多いようである。つまり、VUにおいて学位を得ても高卒資格のままで大学卒業資格者として認められているようであるが、全体としてはまだその認知度が低い。特に、わが国の大企業や役所（公務員）には、途中からの学歴評価の見直しという制度があまり見られない。

### VUの教育的視点と経営的視点

オンライン教育での学習はかなりハードで、それなりの努力がないと卒業（資格）に結びつかない。その努力をして卒業した学生には、通信制大学または通信制学部でも一般の大卒資格と同等の認定をし、大卒としての評価（給与基準）を与えることが望ましい。VUの教育的視点が公務員制度の改革を率先させることも必要で、社会の改革に大学教育が関わることも重要である。

VUの社会的評価を高めることは、オンライン教育を受講する社会人学生増につながることであり、それは結果としてVUの経営的視点からもプラス効果となる。

## 7. 結論と今後の課題

2019年度東京通信大学共同研究費助成課題である「バーチャルユニバーシティにおけるキャンパスライフの現状と創造」の研究結果の報告を行なった。

東京通信大学のようなバーチャルユニバーシティにおいては、学生生活を実感するためには何らかのオンラインツールを用いてオンラインキャンパスを作り出す必要があるが、これまでに提案され、実践されたオンラインコミュニケーションやプラットフォームのいずれも見知らぬ学生たちが信頼しあい、新しい知識を共に創造していくような環境の創造に成功しているとは言い難い。本プロジェクトはその解決策への手がかりを参加者の心理的、社会的側面に求め、アンケートとインタビュー調査を行なった。その結果、多くの学生が孤独感や不安を抱えており、他の学生との交流を強く求めていることが明らかとなった。しかし、それと同時に学内 SNS についてのデータの分析や調査結果から、現在の交流のプラットフォームにおいて否定的な体験や印象を持ち、特にやりとりの中に「負の連鎖」とも呼ぶべき現象が見られ、オンラインにおける交流に積極的に参加することに躊躇いを持っているというジレンマが明らかとなった。さらに、経営的視点からの分析も加え、これらの問題を回避しつつ交流を即すための解決策の提案を行なった。

今後は、提案したインターフェースやプラットフォームを実装し、検証する機会を持ちたいと考えている。

参考文献：

Croft, N., Dalton, A., & Grant, M. (2010). Overcoming Isolation in Distance Learning: Building a Learning Community through Time and Space. *Journal for Education in the Built Environment*, 5(1), 27–64.  
<https://doi.org/10.11120/jebe.2010.05010027>

- Harris, P., & Moran, R. (2020). *Managing Cultural Differences: Leadership Strategies for a New World of Business / P.R. Harris, R.T. Moran ; ed. de Judy E. Soccorsy.*
- Oda, H., Enomoto, N., Kawashima, K., Imahashi, M., Fujita, N., Nakamura, H., & Mori, K. (2020, 4月10). In Search of an Effective Online Campus for Online-only Universities – The IAFOR Research Archive. *The Southeast Asian Conference on Education 2020: Official Conference Proceedings*. SEACE2020, Singapore. [http://25qt511nswfi49iayd31ch80-wpengine.netdna-ssl.com/wp-content/uploads/papers/seace2020/SEACE2020\\_56278.pdf](http://25qt511nswfi49iayd31ch80-wpengine.netdna-ssl.com/wp-content/uploads/papers/seace2020/SEACE2020_56278.pdf)
- Parr, C. (2013, 10月17). *Moc creators criticise courses' lack of creativity*. Times Higher Education (THE). <https://www.timeshighereducation.com/news/moc-creators-criticise-courses-lack-of-creativity/2008180.article>
- Robinson, D. J., & 池田輝政. (2002). オンライン教育は大学の未来か? *Nagoya journal of higher education*, 2, 147–159. <https://doi.org/info:doi/10.18999/njhe.2.147>
- 高谷邦彦. (2017). ソーシャルメディアは新しいつながりを生んでいるのか?～女子学生の利用実態～. 名古屋短期大学研究紀要, 55, 13–27.
- 小田弘美, 榎本則幸, 川嶋啓右, 今橋みづほ, 藤田則貴, 重村智計, 中村宏, & 森. (2020a). バーチャルユニバーシティにおけるキャンパスライフの現状と課題. 東京通信大学紀要, 2, 35–50.
- 小田弘美, 榎本則幸, 川嶋啓右, 今橋みづほ, 藤田則貴, 重村智計, 中村宏, & 森佳奈枝. (2020b, 3月18). 通信制大学におけるオンラインキャンパスのあり方に関する一考察. 大学教育研究フォーラム.
- 青山, 磯野, 内田, 宮沢, 山田, 新垣, 折戸, 都築, & 野口. (2018). 大学生における SNS 利用の実態: 使い分けを中心に. 成城大学社会イノベーション研究, 13(1), 1–17.
- 川喜田二郎. (1967). 発想法—創造性開発のために. 中央公論社.
- 川喜田二郎. (1970). 続・発想法: KJ法の展開と応用. 中央公論社.

i Campus Democracy Org.2006-2007 を参考。オンラインの企業大学がアメリカでは多数存在し、そして問題を起こしている。破綻した大学、また学生から学業に関する訴訟を受けているオンライン大学もある

ii Robinson & 池田(2002)、p 148-149 を参考。

iii 格付け AAA は「債務履行の確実性は最も高く、多くの優れた要素がある。」という評価である。

iv Harris & Moran(2020),p394 を参考。

v 2017年11月、当時の安倍首相は第3回「人生100年時代構想会議」の席上で「リカレント教育」の拡充と財源の投入を宣言している。

小田 弘美 (おだ ひろみ)	東京通信大学 情報マネジメント学部 准教授
榎本 則幸 (えのもと のりゆき)	東京通信大学 人間福祉学部 助教
川嶋 啓右 (かわしま けいすけ)	東京通信大学 情報マネジメント学部 教授
今橋 みづほ (いまはし みづほ)	東京通信大学 人間福祉学部 助教
藤田 則貴 (ふじた のりたか)	東京通信大学 人間福祉学部 助教
森 佳奈枝 (もり かなえ)	東京通信大学 人間福祉学部 助手